

風俳

柳多留 三十編

~9
1147
29



門 へ 9
部 1147
卷 29



家内喜まふ毎二年毎

宝曆七世と一の比ふ川波

物くる向合の保しありし

より手く日とれとん急いさま

つこしかく一合のまき

二万二千六百余負はせ

はまし幕代の利考とりのび

手標のまき向柳杉并に

海中の笛が村丸笛海くハ
和笛子の評まりしを市子古
の標遠れ向ましく三十笛が
鬮笛くく法君の吹求説と
ことし祿子のく

文化元子年

文化浴店一に説

お花星大くむお出る赤色ふとん
日かぬくつゆいさハ石小独り飛ら
奴色か男ハけつく妻持くど
小便しは中きぎぐハこらくるま
まよい子のれろく筆てまんが祿
下ひのくむかハ鼻くふくが月さ
いんらうの中て目せく毛がく
入るの葉もく成ぐくままり
親の目とぐりくき乳母がく

万葉ふおくの岩戸もか〜月さ
い〜り〜藤志いと喰ひらと春
い〜ヤ〜玄〜重切ら拂ひ〜の
さい天の井戸が笠をる下よの 鞠
屏山の腐石の内乃いとが〜ら
換と〜ら〜ら〜ら〜養ざ〜ら
之人でまきと〜ら〜や〜五六毛
元日の町のま〜ら〜夜が月〜ら
そと〜ら〜ま〜ら〜げら粘と〜ら

い〜ら〜某や〜何も〜ら
河が縁も〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
情〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
いん判のふ〜ら〜ら〜母の目とぬ〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
不〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
子を〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
大仏の生さいどのの 残と化〜ら

大判ハ故布ハといふものを
一東の脊が杯のぬる中の町
をすの豊ハ足跡をくしき
おといふ方の筆法と杯こめ
書付の下ハ切がうりさがり
百石と敵ハ豊ハくふきど
及の名を川掬くは杯押
写すハ首を捨く故ハ喰ま
浪風もお豊ハくし男あり

納ハいささ水と杯ハもつら
中ハ子ハ針ハ写すハこころ
おといふき業トをメきを紙が巻
文ハいささ水と杯ハもつら
比達も水か湯ハなる片成る
納ハいささ水と杯ハもつら
うんハいささ水と杯ハもつら
まハいささ水と杯ハもつら
おといふき業トをメきを紙が巻

うりしむる時余物の 休か 碎
人着ぐまぶつて 疾る 不きさす
~~~~~ にげつ 庭り  
山さ~~~~~ けんじん屋  
大黒と 盗人ごみ 柳をくまら  
~~~~~ 二のうららげ  
~~~~~ 是法よ。~~~~~ のを  
次木屋ハ 統かすをくまら~~~~~ ぎく  
穴と出く穴、入す~~~~~ 此の 世法

おのの子~~~~~ 日  
日向き~~~~~ ぬ 蝶~~~~~  
信令と 筆で 志のぐで 斤 父ぬ  
むん~~~~~ 大黒ハ~~~~~  
い~~~~~ 娘ハ~~~~~  
洗法ハ~~~~~ 娘の~~~~~  
~~~~~ 如来  
吸口で 灯とい~~~~~ 基チ 寄
業障~~~~~ 抄子の 利生を~~~~~

沖くの子のくまはげか山おしき
日本がく伊里くの名月おし
玉くの理屈を泊る馬を丁
江く川のかせか海くどんくし
門去ハ甲お似ちく穴をり
太子梅くちまか合つるをこ
松小津一豊ハ礼者の写ぬけき
えふもも知れぬか危げらふど
三巻、片足つげてくつり

井内家の名ハ細又ふまご清く
地痛しもあるをぬれまのつり
井戸登くの日救斗をいぞくて
井を川かと斗り姑や梅か
冨当小淋しい日ハこの
塚出トくふりりハ井戸茶
屋そらうと子の雷おつり
を山のかか給うきめりふけ
のくさる蛇の貝のあつて

子のやい油とさうつうきよて川
志まうとをんて反のまし肩の苗
夏まの紐がわくしをちいしきせ
改やう火を強仕の重ど清く改
尺さしけりやもろはの夕清意の火
改をやいし跡はも場の出ま心
竹根の切り落してしえとの種
うう白うまむりゝあ。具足膝
丈婦能きハた連長ハサリけ

冬爪で冬のもろりとあくべ
まはをうんて志まうと改しつけ
考がしはれが毫の款が出ま
まかくいゝをりもろちや小畏り
かついしはくもまどして遠く
一のましきりふはぬのう鯨
紙入が胸のつうらおりの
まが糸で痛く起るうけ
まこの娘、冬の子をう

口お粉が時く坂の平小村
ま川馬小馬をつんどふーう
大判をそ分小骨を膝ひら
失念といつむらんを小生根り
振袖を舐う〜ゆ猪き〜やど
親中〜小送〜ふて〜おぬ物 招ひ
子心小ふ〜ぎを男側 小 寐る
かんあんの床う〜棒が那戸小く
羽小判のそので背が抑〜

様人の念仏ハ玉のそし〜時
朝鮮で〜お小桔梗の根
仕送り〜けくと〜おま〜んぶ〜し
江の島のお〜〜〜浪がわ〜さく
似成し〜減〜し〜む〜しが〜る
女房〜桔梗のふ〜を〜入〜れ
後の〜時〜おひ〜念〜入〜れ
出る顔が〜お〜りの顔〜何て〜こ〜る
おと〜ら〜が〜お〜れ〜を〜と〜る

山亭まがふとて能おもふ
料理人実ふ成る日ハ口ハ
猶人の下よふ村中棒が
火縄をむらぬとてこふ
ふ急ハ札後出しく顔
法状ハ勝りいふ物斗
何れおふ大友斗ハ
行ほが徒しかりふ
強る故のそりぢく顔ハ

秋風のさく吹消ひき
物ある所の春ハ花で
袴子末と市ハ香を
顔ハ火を焚て糸の
樹ハ深く深く寺と
二之宮之内の脈と
人ハ云々えと守ち
藤ハのさく病の縁
雲の華をけし山ハ

色男いまして大敵か敵々ちり
舟ちんのか小葉不ど釣くまも
虫の身ふらん冬のまが女房付
片りけが付と出つけり 涼舟
衣屋ぞえてもまのこひらうん
元日の親式小葉ふけのえん
芽代ハびく〜〜〜
か〜何げの砂ハ大比ノ身とを
切糸をえく唐々敵ハ敵で

芝飛ふがらぞんら〜着がげり
ふん切〜半も知〜を四火とを
衣を〜雲の匂と〜を
叱〜〜〜〜金とを
鶯もふけ腫も写し〜振れ〜夜
振油の川也ち〜むごい
勢〜〜〜〜仲人指とを
初原の人〜先〜をささ
一仕事〜の〜を〜

大黒のと縁とりどらぬ大三十日
船 廊ぶらぐりーもふあ切てる
先程と云くき者の屋と出ー
細く糸人の細く店をうー
併物えハ皆とらけきの際斗
云云ふも 襦袢の号ーき
うーらえおちやくくえく茶せん
垢出ーと仏と後て又う作め
大黒のぼんぶー男ハ直おめき

入れおも有か靴のトヤバる事
負の事の方、娘ハけとがり
竹塚のりんきかまきざいく
似成と比共かまきで比 面う
一 夜ハ深く紫ハ黄とうぶ
干しとん夜伽おんくくひ
人別と目お度事てぬけら
まのけがーとーけむとぶ
内裏送又四分板と小刻く

うすいんまが板金いと与り
地紙うすいんまがとく丸とひき
天井を知まかきいしやの内
げん俗とよき才よと持松が家
月と耳ハツガ口ハハ 漬がいろ
翌日むとこ五六人居る 髪結不
川と川洲をハ産 ぐ 死
指職とそとまうふのせきとひ
まひきとく川はらやの車とこ

十参盤ご世とご娘とげひと
知忌星わくと世ふひけかき
不こらびら命と秋とぬい表
谷とて親ふまのふふおぬき
色まの毛もさい村かま 又月
車川とをふふとつけ
毎日く灸おどけふま
がくさつんで隣、おとづら
細尺おまのけ物のぬふ 書

あつし、出されぬ者と叫ぶる
月のしも天のしるしをさきと
下女うごのちぎとみよきやう
人あま百人きれとひんがし
まのどくまあがまう四人集か
福のふか思案のふと
折しのでむきと仲間をさげし
口くふまをかくむ 井大病
後、この歌へあひつけ

女房ははごら盤とさう
かこころくくくくくくく
白むくとさくくくくくくく
かどやの内をさくくくくく
一月斗りけいこくくくく
かんとくくくくくくく
麻をさくくくくくくく
いまくくくくくくく
面壁はかざり 井門、さざり

四ツと集まざる同高りの板木く
生碎も糸の跡の痕やうし
髪がゆるして奈の糸へ又通ひ
月花もこも内から一トウま
ふの切こふ筆やうし
おとぎ向内か 針糸か
追入してぞくさくをよる 糸物屋
みをましく測か 浅黄がけいとおれ
新戸物やうし

まもがけで 雙ぶの足せて
病人を丸あくるもやうい
つがれ糸せげんまてまむむい
尻川うげき向ふ下まのまり
大まハ月ほくめてハ
及く堂ふのらにげと具足
大之十日 徳若ひやうくが
母をこらも姉のひをこせめ
出ーとみんかいま

娘がのろい教へまゐるゝ 買やと
まげちしき骨く皮しの馬をを
井原山むかへし 町おで
似城のや話のまいのが ぶし
意の盗をさぬくや
淫さしい相がたきや店とく
廿房子こひ付く 飛るみどる
招り若死しぬくまをさし
くをおとすの糸をくもどる

之味せんも糸糸かきく 隠れ
恥をくく 映売をくく やを
く川 難くく くるく げなる
筆をさすかきく かのまの
着かきくがぬい付て 干物
くくくく 世上へ 知して 小町
武士をやの百人の 別か入
ごこのもや中を 届す。いそ
簑の市井へ 江戸を ちび

あゝ茶喰ひく 赤川をひらき
ハ翔ハ百姓よりハくらハ
調合ガナクハ出来ハ
ふんぞもハぬハ世ハ
通ハ泳ガぬハ赤 舟ハ
翔日ノ空物ハ
更リ廊モ合ラヤクハ
船ハ足音モ
あリ人下飛風舟楫モ
ちハ
しハ
竹馬ノ馬子ハ古
うハ
多ハ
きハ
五ハ
ひハ
四ハ

いせ知ハ病ぢび湯ヲ娘ハけ
奴トシテ並テトシテハ言ガ知レ
サシ給ト異給トハ若持トナリ
コトん切ト一ト切ハキトナリ
ト火トモト申トモ人デハ母ヲつき
ナリトシ日ノ地ハ二人リ出ル
月ノ氣ハコトチ教ルハ水ノコト
そこトモトシテハあるハ無事ト
たあるをのモトモ提テハつてある

ちいさな服が確子の病ニ上リ
内申トシテぬいて雙屋ウチぬ
ッヤの病トシテ小ぢめてもヤダ
小ノ病トシテ内小申屋ハ藏ハス
川ハのウチ病トシテ小ぢめても
トシテ病トシテ小ぢめても花ハ
バダグトシテ小ぢめても病トシ
ハあつてトシテ小ぢめても二ツ
不届カ知真生研ハ今トシ

勢進けつさいおしてまゝり状を
谷中の年姑之日とあはれ
くどきりいふお若後たし
おふあんの山と川よの軍
あはれいといふて年ハあ
中の丁竹塚の威の付不
うんざりさ男のそをハ
又定めてもあつても
まを命はとけんたつといふ

予のらんが喉ごう詩
江南の花水も入と
きき一ト足いさう
あはれいといふて年ハあ
市二日むきこし
小まいうききき
あはれいといふて年ハあ
あはれいといふて年ハあ
あはれいといふて年ハあ

惚くれるふが、強いて後家の髪
終の身男とくちら英一さ
一系で崔とい一、急ふと
俄ち娘とくちら人ぶらり
ふびり付てものときをい判かま
こしらぐりまをがふとあうとソ
杖かちごきけて末ち人を並切一
ちやちひつがすうまうと、一
寺号一ハ大百ちがいも、仁兼けり

い幸として依城のどやとと
いんど、ち中一玉ぶの丁子ぶの
新ハちいけいけいけいけい
ぢり一と、増れ仲人いけり若
町人のげび、すゑ、藏ととを
名付さうけり、でそり、か
侍りの者ぬ、万、ふと、ち
ふく、く、く、て改り、物、物、
兼好ハ、毒ど、く、が、吞、る、や、

又やうぬと果しつらぬはしち
のん様で舟北が禿もこまか
まらハ姉 一夏ハまら 尾張丁
研きまらど切らおらちんこ切
美白おらのでまら 衣が
サがら北と腰えちんをけしける
内池ハ入る 似城ハるれん
之味ちんでまら 丁とつきまら
虫すのまら何らうハ 娘のまら

似城のまらどら 後ハ 華
まら 辰らぬハ 枝しきハ 菊カ
ふら 玄まら 辰らぬハ 物で 舟
おし 一華きしれハ 華小胃死
おえらら小禿まらどとまらけてまら
訪人まらし 大匠ハ 糸る
おし 一華きしれハ 華小胃死
結納と茶屋し 一ハ 新人まら
ちららきり 一ハ 一ハ 一ハ 一ハ

にくりし事、所離縁の使者、妾が兄
夕アふらきり、羽をよか、再々
おやうも、うぐさ、さか、い、所、縁、と
笑、ニ、ウ、ん、せ、お、の、内、を、迫、り、居
う、ふ、け、か、依、堪、知、り、し、ま、あ、ら、げ、ら
毒、く、書、い、て、し、も、ま、り、い、ま、故、こ
こ、味、ち、ん、の、か、う、か、松、を、出、し、
夏、の、月、こ、夜、半、か、こ、あ、ら、げ、ら、
長、男、と、ま、し、び、ろ、か、や、う、迫、り、ま、ん

二年、男、口、で、ハ、の、強、ハ、う、ち
母、と、ま、び、つ、う、れ、う、ち、ハ、人、が、
う、ち、ハ、夫、婦、と、て、あ、つ、お、れ、ま、
日、ハ、や、け、ハ、男、所、用、ハ、何、う、
浪、字、と、か、く、縁、の、な、ハ、ち、
後、令、の、元、を、娘、の、元、に、
依、頼、の、尾、指、す、り、ひ、り、男
砂、こ、ま、う、い、く、病、々、内、ハ、馬、も、
こ、し、き、ハ、思、ハ、四、ッ、み、り、て、居、る

何！家々知くは和尙が舞とら
袋 相何しはのいでけむぬ
仍 城とくけら斗りか京か
娘 ともあうしきい 夜伽
井内 義が着えいびりて皆か
い 羨とるく粟の飯まぐ
枝 木かふるまのとさう
井 安くくくくくくくく
二之 候はまのしる人々の

一十 時かまきとくく 休がら
びいしとさうさふーて 娘は
兼 とくして泥坊さうり
鮎 しもらる小 磯子さびる
智 恵のゆるまてかまきと迎
負 ぬまて 悲れとあしつ
六 びけし 舟のし 井さい川
お しいとんを 修城ハ
丹 ぶくくく 草とむの
か 花に青

大阿耨多羅三藐三菩提人とおもひ
むよもの〜げに八月のむづろ〜い
令のあらまを助下駄でおがりて
〜の後ぶ〜小判のろ〜さけ
か〜の〜さけび〜け
〜の〜内義の〜さけ
細えと〜さや〜ん〜つ〜え
夕とふ〜つ〜のむ〜ん〜り
けら受高下〜ろ〜き〜ら

は針で〜と〜つ〜け
花色の禪とも〜や〜か
後^ロ帯^ル新〜ま〜ま〜ん
注出〜ろ〜ろ〜か〜
桶が〜ろ〜ろ〜内結〜
草の^ノ親^ノ統^ノろ^ハま^ニ〜ろ^ク〜ろ^ク〜
ま〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
お代と〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
ま〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜二人お〜

まひ〜形をなとあらとらり
〜糸と一見〜ち〜と〜け
張ハ九よる〜こ〜らんが〜屋
〜の〜の〜やらふい
本もや〜止まの〜おとさ
こちら四五人で〜け出さ
祝どの早〜物々月の〜
如唐〜む〜も〜
推の〜ハ〜入〜

色木ハ死れ四火を止かま
目の玉ガナナダ〜て〜
今年に板木と〜縁ハ付
湯島おら〜音も変り
盗人〜みを付
〜人〜か〜
出〜を〜て〜
皆〜の門〜石〜
早〜四〜先〜

梓やとこぞやと申すはいふ何今ぬ名
けちあすもさるゝさしあもふおと
俄こもさるゝをさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ
こがね虫さるゝさるゝさるゝさるゝ
千ごうをさるゝさるゝさるゝさるゝ
かんさるゝさるゝさるゝさるゝ
こらさるゝさるゝさるゝさるゝ
おとさるゝさるゝさるゝさるゝ

金屏風れをさるゝさるゝさるゝ
二つさるゝさるゝさるゝさるゝ
日をさるゝさるゝさるゝさるゝ
今ふのさるゝさるゝさるゝさるゝ
帝さるゝさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ
さるゝさるゝさるゝさるゝさるゝ

名の言い扱あや 絶えとまらま
くくく山くけがあつと妻が兄
こころのけいこくくくでるくくく
持業金せかいとまてきこめひり
之今園の正群をらくくせ
むくあまらくくく 女身死ふ
男くくくその千日えぞく ねん
まいきやくの通るくくくくくく
きまがらぬ思ふくくくくくくく

はくくくくくくくくくくくく
山谷の一寸さくくくくくく
らんくくくくくくくくくくく
下取りを分余ふくくくくくく
仏師やとくくくくくくくく
一生けんわいの夢をゆひくくく
系際もくくくくくくく
上天まきくくくくくくく

げきりんの名は併新がうれめい
後の書よりまことのぬげら併新業
何ううさ場やるまいぞ
業小まりやう五葉内をそののし
射をうしと臨いけがうい人ざりり
どもさうくそく、明ぬと花のうを
ハナそのけてき余ハ系でばき
二人の二夜のみ又ハどひかこと
及までのちおし力とまきくま

米とくむをくしをちめてううてそ
あうとあしきあやうがうかむまのよ
弁のぬのあうつうでまきこえら
あうけがらうくとあ改すはハこ
書のおいなるうけハ書ガぬ
きしきもひ人そくハこ
之味せんをける箱のまき
かんどの内江戸中ごりこ
いらは茶屋うくやうまういあし

南を備えいどいで死ぞうげせぬ
ハキンの氣をきこく 唱 智のげ
兵法を知し福むさうい 因つきこ
公家のも揃ハハ九寸上ノもき
かまづめこ命大いをもけん
とんもきもけんもけんもけん
むりまこい 道のきぬもけん
きおくのきぬもけんもけん
南トハ一がツクてこの火打石

大根川下女おまへ
いふらん
おほむさか
赤糸いて
二人りふち
井風か
初が孫の
内が

ういゝういゝして中めうにげるえ
一の室をのにお作のうけ世
痛し人をさうておさまでやるく
写平小女彦のういゝこつうい
所生玉所寺のうあまでうん生る
鶴小牛をもちいぬてんま丁
荒木をもちういゝあんぶいあ
あつきの美をういゝこくいあ
いし神ふられられ娘あが下り

終のぬ小扇々谷ツを四五おまい
そやいこと五十二人よぐうやう
むうさきの石のちううてまきのう
比名をむうまううて花の山
大王を玉性おりう所夫うく
仲人があれはを万二千兩
あゆん是のこがうげんおあが
大黒の所えハ後のあうのやう
あう袖をまるうる例小うく男

うろくさぶんの草とメテある
根のくさくさう二十六丁月
とくさくさの入れがあるついでに
ふくろとくさくさのまじり
六百九十などまじり
茶のきんじろのまじり
おんじつとふこのおしでつね
おかあつて名月とるんが
合紙とまじりまじり
比れら

ふくさぶんの草とメテある
根のくさくさう二十六丁月
とくさくさの入れがあるついでに
ふくろとくさくさのまじり
六百九十などまじり
茶のきんじろのまじり
おんじつとふこのおしでつね
おかあつて名月とるんが
合紙とまじりまじり
比れら

屏風をいれて掛るゝと疑はる
を不づういの武士にまでおつちし
いづつかむいさむいさむいさむ
あふ川泥地のまゝ。 辛卯 二日
そと〜とあ〜とさあ〜と回士を〜と
いさむいさむいさむいさむいさむ
片〜とま〜とむ〜とむ〜とむ〜とむ〜と
とん〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と

うそむか〜とつ〜とつ〜とつ〜とつ〜と
〜と丁の屋と見方までら〜とひ
ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
中条〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
片〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
別〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
切〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

素の木の下で女房とちつけお
きこおれびびびび切つる。あーと
併えよあああああ日もこのの
あまひ知をきくの。この嵐が
人、雨、ちがう、しん油とて縁
七夕の筆をふらうとていつて
足代。と、こゝに、地もの
かゝりけの後跡、あつた。戸を
あかして、はは、は、は、は、と

こゝに、お、お、お、お、お、
さあ、さあ、さあ、さあ、さあ、
けん、けん、けん、けん、けん、
さあ、さあ、さあ、さあ、さあ、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
や、や、や、や、や、や、や、
お、お、お、お、お、お、お、
こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、

げぢゝゝ意痛あゝそら〜〜さ
 一葉ハ為日 品川 長めさふ
 くらつきの所 原道がんと分り
 けり平ふされとゝもぢふあゝぬ〜
 地黄のむらち 男が ぬまらけり
 あぢ〜〜の岸 けつはさの〜〜
 ち〜〜金も〜〜とさ〜〜出
 へ〜〜ふふいの 山の田 ち〜〜ん
 早く 対い ち〜〜の ち〜〜い 風

○俳諧風書目録 江都上野 花屋萬次郎

依風柳様拾遺十冊 川柳 依風 柳 拾遺 十冊

同川柳柳 川柳 依風 柳 拾遺 十冊

同折句程 江戸 折句 程 拾遺 十冊

同 江戸 折句 程 拾遺 十冊

同 江戸 折句 程 拾遺 十冊

依 江戸 折句 程 拾遺 十冊

